Prepare for disaster

防災だより

No.3　2021.11.10 発行

宮城県村田高等学校 防災委員会

知ってました？ 11月5日は『津波防災の日』『世界津波の日』です

『津波防災の日』は，1854年11月5日の安政南海地震による津波が和歌山県を襲った際の「稲むらの火※」の逸話にちなんで決められました。

『世界津波の日』は，津波の脅威と対策への国際的な意識向上を目的に2015年12月の国連総会で採択されました。

※ 稲むらの火：紀州藩広村（現在の和歌山県広川町）を津波が襲った時，浜口悟陵が稲むら（取り入れの終わった稲わらを屋外に積み重ねたもの）に火をつけて，村人を安全な場所に誘導したという実話にちなみます。この実話をもとにして作られた物語が「稲むらの火」です。

あっ！地震だ

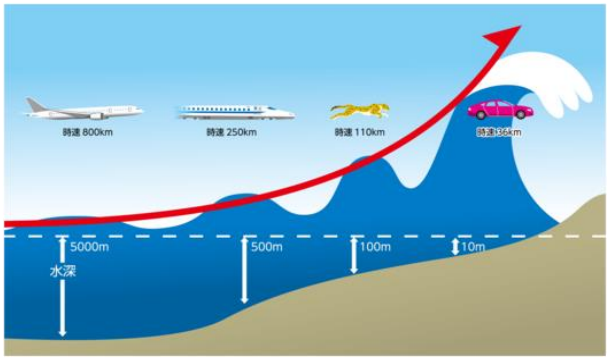
どうしたらいいの？

まずは揺れから身を守ろう！

安全な場所に避難　姿勢を低くして身を守る　かばんや本などで頭を守る

“より高いところ”を目指して逃げよう！

急げ!!



津波はとても高いので，
津波を見て逃げたのでは間に合いません。
津波は海の深いところではジェット機ぐらいの速さで襲ってきます。

「車で逃げれば大丈夫」と思っていませんか？
車を利用した場合，渋滞などにより円滑に避難できない恐れがあります。
原則，徒歩で避難しましょう。

避難所ではなく目指すところは避難場所！

どこで津波の被害に遭うかわかりません。津波から逃れるために，お住いの地域や旅行先の「津波の避難場所」を確認しておきましょう。また，日頃から色々な場面を考えて，避難経路やいざという時の行動などを家族や周りの人と話し合っておくことが大切です。

（🏠 避難所は，その後の避難生活を送るための場所なので，切迫した災害の危険から逃れるための避難場所とは違います）

社会的慣習や油断が正しい判断を誤らせる！

指定避難所 は知っているけれど ‥‥

本家はこれまで土砂災害にあったことはない

まずはみんなで広い本家に集まろう

裏山が崩れて
一族全員が亡くなる

▒ 大雨で避難勧告が出たとき，親族一同が指定避難所ではなく，広い本家に集まるしきたりがあった地域の悲劇

また津波警報 が出ているけれど ‥‥

これまでそんな大きな津波は来たことはない

だから今回も大丈夫

これまでよりも
大きな津波 が来て飲まれる

▒ 第一波が小規模だったことから大津波警報が出ている中，自宅に戻りそこに思わぬ大津波で飲まれた人もいる

津波が来てもにげなかった人が“4人に1人”！

２０１１年 東日本大信火災における，津波（最大波）到達までの
住民の避難率　調査対象者：４，４２１人　『津波災害　増補版－減災社会を築く』（岩波新書）より

- 津波が来る前ににげた人 ‥‥‥‥ ６２．６％
- 津波が来るのを見て逃げた人 ‥‥ １０．６％
- 避難しなかった人 ‥‥‥‥‥‥‥ ２６．８％

４人に１人が逃げなかったなんて ‥‥

「今回も大丈夫」と判断してしまった人がそれだけいるのね ‥‥

次の南海トラフ地震は遠からず発生する

今，もっとも心配されている南海トラフ地震は，明応地震以降で見ても，明応(1498) ➡ 慶長(1608) ➡ 宝永(1707) ➡ 安政東海･南海(1854) ➡ 昭和東南海(1944)･昭和南海(1946) と約９０～１５０年周期で発生している。最後に発生したのは昭和南海地震津波(1946)。約９０～１５０年周期と考えれば，遠い未来ではない。

『信頼』について （内田より）

「信頼の度合いは，人の死や緊急事態，困難の状況の時に分かる」幕末の志士（長州藩）高杉晋作の言葉である。

高校1年の夏，野球部の校内合宿でのことである。ウチダと同学年は25名と部員が多く，合宿所には入りきれず，1年生10名だけ（ウチダを含む）は教室での宿泊となった。合宿2日目の夜であった。消灯は夜10時だったが，10時半頃，一人が何か探し物をするということで電気を5分ほどつけた。電気を消すと間もなく，ドカドカと教室に向かってくる足音。戸がガラリと開き「誰だ！ 電気をつけたのは！」突然入ってきたのは，野球部の顧問ではなく，何故かラグビー部顧問で生徒指導部長のM先生であった。理由も聞かず，「全員起きろ！」の怒号で，我々10名は廊下に並ばせられ，ホーキの柄でぶちのめされた。そして，「いいか。一年生10名だけで教室に宿泊するなんてことはダメだと，キャプテンのKに言ったんだ。そしたらな，Kは，《今年の一年生はきちっとしてるので大丈夫です》なんて言うんだ。そうか，お前は一年生を信頼しているのだなと聞いたらな，《はい。信頼しています》と，はっきり言ったんだぞ。それでな，許可することになったんだよ！ お前らは，キャプテンの信頼を裏切ったんだ。分かるか！」そう言って，M先生は立ち去った。ウチダたちは（理由ぐらい聞いてほしかったが），キャプテンから信頼されていたことも知らず，只々キャプテンに申し訳がなく，心が痛んだ。それは，ホーキの柄よりもはるかに痛いもので，今もその痛みは消えていない。以来,ウチダは「自分のやっていることは，誰かに信頼されているからこそできているんだ」と肝に銘じて，今日まで生きてきた。

生徒諸君，災害が起きた時，家族や友人と離れ一人の場合もあるだろう。家族･友人から，すぐに避難しているはずだと信頼されていることを忘れてはならない。